

『弁註』の引用について (三)

鈴木 祐孝

はじめに

『弁註』の引用に関しては、都合四回の発表を試みているが、現在は『弁註』の引用された經典、語録、外典等の整理段階をおえ、そのうちの經典の分野にて特に引用回数が多い法華經、涅槃經、華嚴經等に注目している次第である。既に涅槃經に関しては、その註釈書である『涅槃經疏』の引用を特に取上げてその引用された天桂伝尊の立場を明確にしようと論じた次第である。その結果の一つとして、教家に対しての批判がみられたこと。その根本とするところは、単なる語句、語義のみによつて『正法眼蔵』を論ずるべきでなく、あくまでも本質の義を追求することに重点をおいた場合、先の『涅槃經疏』の引用が注目されると思われるのである。この『涅槃經疏』の著者は天台智顗の筆録者、章安灌頂であり、教家を批判する弁じ方は、これらからもある程度、教学を考察する好資料と思われる。しかし現在は、未詳その他の課題

とする部分が多く検討中である。

次に法華經に関してであるが、これ又特に法華經の註釈書、いわゆる天台三大部と称されておる『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』であるが、中でも法華經の經文の文々句句々を註釈したところの『文句』の註釈書に湛然述になる『文句記』さらに時代が下つての註釈書『三大部補註』『私記』などの各註釈書が系統たつてかなり多く引用されていることが明確になつてゐる次第である。この法華經に関しては特に經文を引用し、それに対しての註釈書として天台三大部の引用がみられるのである。それらはさらに『弁註』各巻についてそれぞれ詳細を究める必要があろう。

そこで今回は先に述べた引用回数が多い經典の中で残つてゐる『華嚴經』に注目して以下をみてみよう。

一 華嚴經の末註書の引用

その考察方法であるが、前に述べた涅槃經、法華經にそれ

どれの末註釈書があつたように華嚴經に關しても例外でなく次の三書が特に引用されているのである。

第一に澄觀（738～839）の『大方広仏華嚴經疏』（華嚴大疏）第二に同じ澄觀の『大方広仏華嚴經疏疏演義鈔』（演義鈔）第三に法藏（645～712）の『華嚴經旨帰』である。この『旨帰』は、『弁註』の引用では『指揮』となつてゐるが、その引用箇所を大正藏にて照合してみると『旨帰』の部分と一致するからして『指揮』は『旨帰』とみて問題ないであらう。以上を考慮して、『華嚴經』に關する考察方法、展開としての第一点は『弁註』の各巻に『華嚴經』經文は多く引用されているが、それは法華經の場合と同様にその經文に關する註釈であるのかという点。もしそうであるとすれば、それを引用して天桂伝尊は何を述べようとするのか、という点を考察してみよう。第二点は、先に述べた三点の華嚴經の註釈書を引用した各巻をそれぞれ考察してみようという方法で、小論の問題とする『華嚴經』をみていきたい。

二 引用回数

『弁註』における『華嚴經』の引用回数であるが、約30箇所みられる。しかし引用回数の多少でその根本を誤つてはならないことは周知の通りである。その回数が多いという点では華嚴經も例外でなく、各巻それぞれに隈無く引用されてい

る。そのことに關しての考察結果から述べると次の様になる。

先にみた様に、涅槃經、法華經と同様に、何々に關しては『華嚴經何々品』をみよとか、何々品の如しという引用態度である。それは結局のところ華嚴經を引用し、その引用された箇所と、各巻の『眼藏』本文との關係を天桂の立場で弁ずるのではなく、本文の語句の意味・出典その他を『華嚴何々品』の如し、という示し方になつたものであらう。そこで問題点であるが、法華經の場合にみられた様に、ある問題箇所を究明する際に、まず法華經々文を引用し、さらにその註釈書を並べて比較検討できる様な箇所がみつからなかつたことが、法華經引用に關する問題に華嚴經のそれとは少し異なるのである。これらを前提にして先の三点の末註書をみてみたい。

三 末註書の引用態度（各巻）

次に末註書の引用回数をみてみよう。『華嚴大疏』八回、『演義鈔』一回、『指帰』一回の計十回程みられる。ほとんどが『大疏』の引用である。それでは各巻に引用された点を少しみてみよう。

『行仏威儀』

この巻での引用は只「大疏に詳かにす」という示し方であ

り、これは『眼蔵』本文の「行仏の仏は教乘に談ずる所の仏にあらず」という文に対しての示し方であり大意の意味あい
で『大疏』ではということであろう。『都機』

この巻での引用は、華嚴経々文を先に示し、その後をうけて『大疏』が引用される形態をとっており、法華経、涅槃経の末註釈引用と同じ態度の示し方がみられる巻である。その内容は、『眼蔵』本文が、月の現成を数字で示されておる個所であり、『弁註』はその点を「数の事は経論を以て弁得せよ」と示しているのである。即ち華嚴経では、「一を増して無量に至り、本数智慧の故に差別すと」、さらにそれについて『華嚴大疏』は、

「一の上に一を加えて之を名づけて二となす乃至百千皆是諸の一なり」と『弁註』は引用しているのである。しかるにこの個所は、経文か受けて、さらに詳しく示される註釈書の意義、つまり経論によれと示す『弁註』の意志に契つた示し方と思われる。これらの天桂伝尊の引用態度は先にみた『涅槃経疏』の場合に非常に似ていると言えよう。それは、問題になる個所にその経文を示し、『眼蔵』本文の解釈、経師、論師の釈によれという示し方がまず最初にあり、次に非常に詳しく、細部における説明等々、つまり末註書を引用する態度がそれであります。

『全機』

『弁註』の引用について(三)(鈴 木)

この個所は「機関」を説明する個所であり物の動すべき所を機となし、その中において転ずるを説いて関と為すと示している。つまり「これは機巧のシメククリを示したものであり、ここで示した理由はあくまでも汝が自心の機、発動し、透脱するの義」と天桂伝尊は弁ずるのである。

おわりに

以上、華嚴経の註釈書の『大疏』についてのみの考察であったが、そのまとの第一として、眼蔵本文解釈にあつたの最も適切な説示方法を何に拠るのか、という点に注目する時、それに一番ふさわしい経典、その註釈書を示し、その後、その註釈書の引用が全てではなく、それを前提として眼蔵の本質の義にせまらなければならないという点が、華嚴経、そして註釈書に注目した場合もいえる。

しかし華嚴経に關しての註釈書引用は、法華経のそれとは少し異り系統だつた引用態度とは言えないであろう。

第二に「自心」の究明が説示されている点は先の法華経、涅槃経にもみられ、それぞれの末註書の引用が、単なる教家批判に終るのではなく、あくまでも『眼蔵』本文への確実なる前進を位置づける参究方法としてあつたということを眼確にしなければならないが、これらは今後継続研究とする次第である。(細註省略)

(駒沢大学大学院修了)